図184　天保六年　各種瓦

ロ　軒丸瓦

江戸時代中期～後期と見られる軒丸瓦が、一二本（軒丸瓦全体の三・一四％）存在した。瓦当文様は七種類あった。元禄期の文様に倣い、圏線で囲んだ「東」「大」「寺」の各文字を三角形状に配し一括圏線で囲んだもので元禄期のものよりも文字が太いものが二本、「法華堂」の文字瓦が一本、右巻三つ巴文で珠文数二五個のもの一本、同じく右巻三つ巴で珠文数二五個の胴の長さが短いもの一本、左巻三つ巴文で珠文数二一個のもの一本、左巻三つ巴文で珠文数一九個のもの一本、単弁蓮華文のもの五本が見られた。

ハ　平　瓦

江戸時代後期と見られる平瓦が、三六枚（平瓦全体の〇・一六％）存在した。篆書体の「寶」の字を圏線で囲んだ刻印があるものと、刻印のないものが見られたが、共に同時期である。

ニ　丸　瓦

江戸時代後期と見られる丸瓦は、一〇一本（丸瓦全体の一・四一％）存在していた。平瓦同様、表に篆書体の「寶」の文字を圏円で囲んだ刻印が見られる。長さが二九〇～三〇〇㎜と短く、太さも尻径で一六〇㎜と細い。

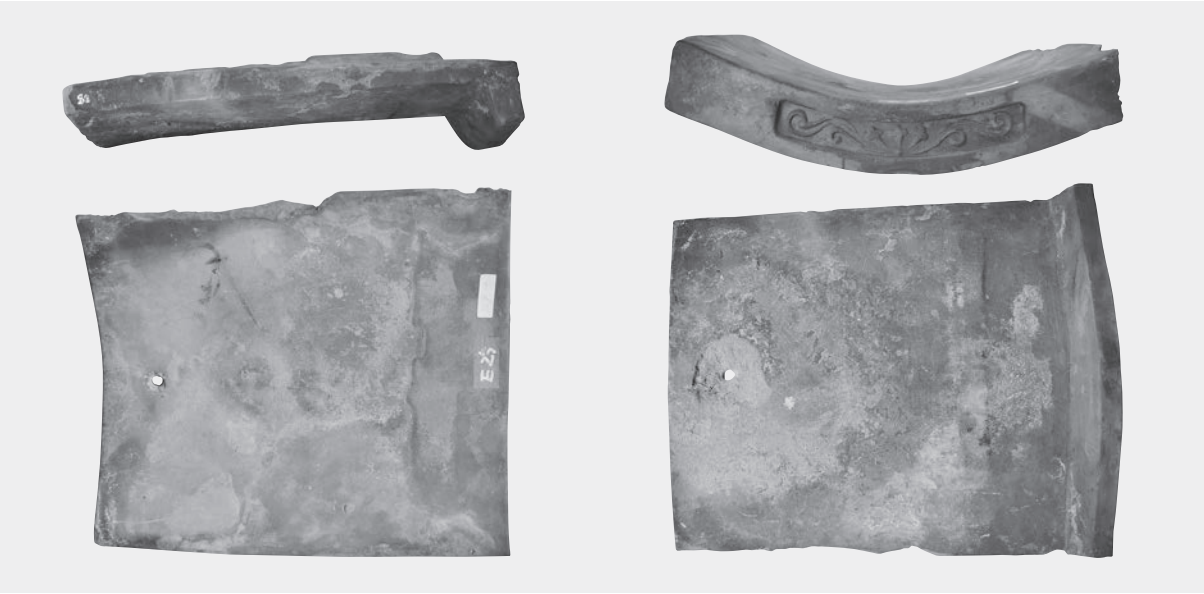


図185　江戸時代後期の軒平瓦

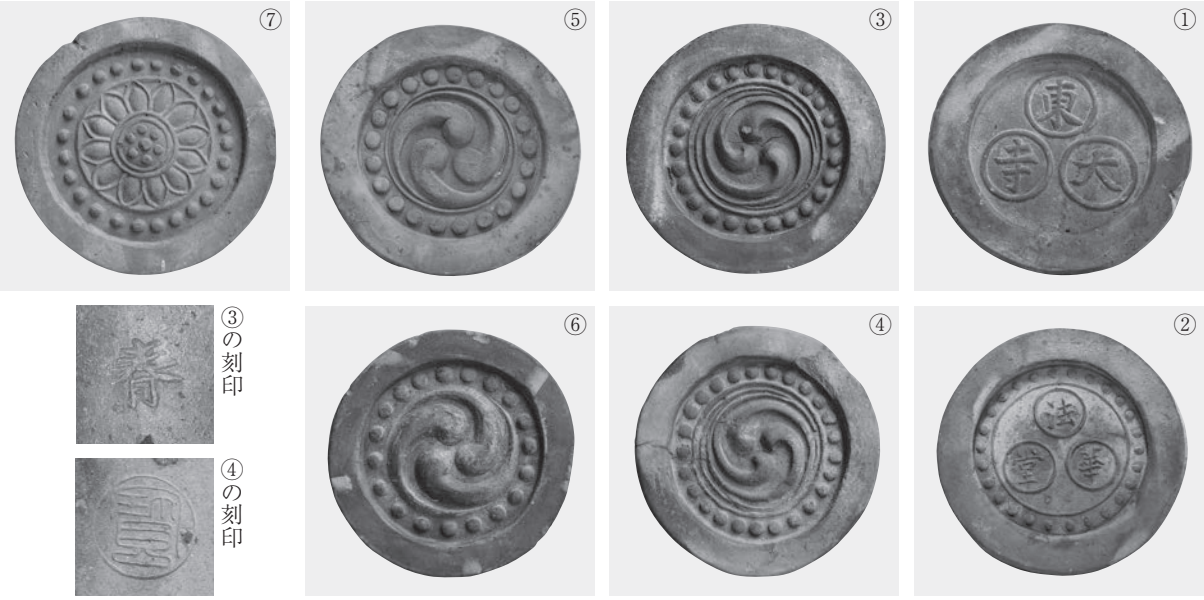


図186　江戸時代後期の軒丸瓦瓦当文様と刻印

（九）明治期

明治期に入ると、修理も頻繁に行われたことが記録からわかるが、瓦はおもに明治二十二年の修理に伴うものである。明治二十二年の瓦には修理年号と瓦師名が刻印されており、篆書体で「明治弐拾弐年修補」、楷書体で「瓦工奈良住人　早川義平造」とある。どの瓦も、表面は丁寧に箆ナデを施し、裏面も叩き痕や、布目をナデ消している。

イ　軒平瓦

明治期の軒平瓦は、一二枚（軒平瓦全体の三・一七％）あった。瓦当に文様がないもので、文字が消された痕跡が見られた。裏面には篆書体による明治二十二年の年紀と楷書体で瓦師名が刻印されている。

ロ　軒丸瓦

明治期の軒丸瓦は、五八本（軒丸瓦全体の一五・一四％）であった。瓦当文様は「正倉院」の文字が五四本、天保期の文字に倣った「東大寺正倉院」の文字が三本、明治三十二年の箆書があるものが一本見られた。

ハ　平　瓦

明治期の平瓦は、三八二枚（平瓦全体の一・六八％）であった。明治二十二年の瓦がほとんどであったが、明治三十二年の箆書があるものが数枚見られた。

ニ　丸　瓦

明治期の丸瓦は、二二三本（丸瓦全体の三・一一％）であった。明治二十二年の瓦のほか、明治二十二年製だが年紀がなく瓦師名のみ刻印されたのものと、表面に「瓦儀」（注一二）の刻印があるものも見られた。

天保六年製と同じ瓦当文字を持つ

図187　明治期の軒平瓦

①軒平瓦

③平瓦

④丸瓦

②軒丸瓦

図188　明治二十二年　各種瓦

明治三十二年刻印

天保六年製と同じ瓦当文様を持つ

図189　明治期の軒丸瓦

（一〇）大正期

大正期には、大正二年に正倉の解体修理が行われており、それに伴い多くの瓦が取り替えられた。その種類は、軒平瓦（隅を含む）・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・熨斗瓦・雁振瓦・鳥衾瓦と多岐に及ぶ。

その八年後、大正十年にも、差し替えを主とする屋根修理が行われたことが今回の修理及び修理に伴う史料調査で明らかとなったが、瓦葺の状況からみると、棟積まで大掛かりに修理されたことがわかった。

各種瓦には、裏面に年紀と瓦師名が刻印されていた。大正二年も十年も共に同じ瓦師で、「京都瓦師西村彦右衛門」とある。また、大正二年製も大正十年製も各種の瓦すべてに、表に布目、裏面に縄目を再現していた（注一三）が、大正十年製の瓦の裏面は、大正二年製に比べると縄目が粗かったりまたはなかったりするものがあり、刻印も篦書でなされているなど大正二年製に比べると幾分省略される傾向が認められた。

イ　軒平瓦

大正期の軒平瓦は、一七二枚（軒平瓦全体の四五・五〇％）で、すべて大正二年製であった。瓦当文様は天平期の興福寺式（六七七一系か？）の文様を復していた。

隅平瓦四組は、すべて大正二年製の瓦であった。隅側に瓦当面が少し長く作られており、水下になる方には水返しが作られていた。

ロ　軒丸瓦

大正期の軒平瓦は、一二四本（軒丸瓦全体の三二・四六％）であった。瓦当文様は複弁蓮華文の外周に珠文一六個を配した、天平期の東大寺式の文様（六二三五G）を復原していた。軒丸瓦には大正二年製のもののほか大正十年製のものも見られた。

ハ　平瓦

大正期の平瓦は、八、七二六枚（平瓦全体の三八・四五％）であった。大正二年製のほか、大正十年製のものが一、一八四枚見られた。大正十年にも比較的広範囲に修理していることが判明した。

ニ　丸　瓦

大正期の丸瓦は、二、六九八本（丸瓦全体の三七・六五％）であった。大正二年製のほか、大正十年製のものが三五六本あった。

ホ　熨斗瓦

大棟の熨斗瓦は、すべて大正修理時のものであった。このうち台熨斗瓦は一五一枚中すべて、割熨斗瓦は一、六六七枚中四七一枚（二八・二五％）が大正十年製であった。

ヘ　雁振瓦

雁振瓦は、大棟の六九本すべて、隅棟も一四二本中一三〇本（九一・五五％）が大正期の瓦であった。さらにその中でも、大棟の六九本中四九本（七一・〇一％）と降棟のすべてが大正十年製の瓦であった。丸瓦より寸法的にはひと回り大きな丸雁振瓦であった。

（一一）昭和期

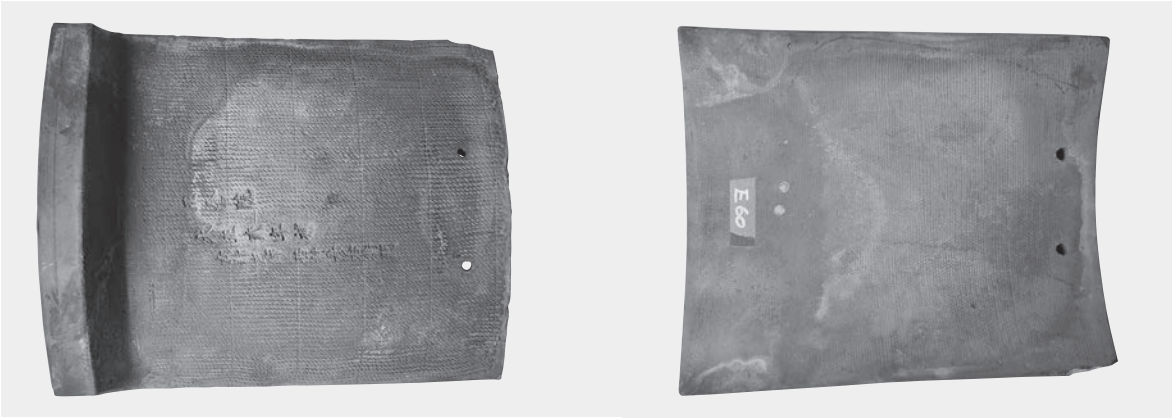
昭和期には、ほとんど修理が行われておらず、修理前に使われていた瓦もごく少なく、部分的な補修を行ったものと思われる。軒丸瓦が、一本見られた。平瓦は四三枚（平瓦全体の〇・一九％）、丸瓦は四六本（丸瓦全体の〇・六四％）であった。雁振瓦には、昭和三十五年のものが一八本（雁振瓦全体の八・五三％）あった。

（一二）平成期

昭和期と同様にその数は少ない。平成十六年に詳細調査として一部の瓦を降ろしたため、平成期の瓦に差し替えたものである。軒平瓦が七枚、軒丸瓦が八本見られた。

①　西北隅（右が西側、左が北側、その他を含め四隅とも大正二年製）

図190　大正二年の隅平瓦



①
軒平瓦

③
平瓦

④
丸瓦

②
軒丸瓦

図191　大正二年　各種瓦

図192　大正十年　各種瓦